

1.2 震源モデル（4）

表現定理

表現定理で、グリーン関数やダブルカップルを理解する。

グリーン関数とその性質

グリーン関数と、相反定理を理解する。

表現定理

表面に作用する変位によって、地震動が計算できることを理解する。

等価体積力

断層運動と等価な体積力は、なぜダブルカップルなのかを理解する。

地震モーメント

地震モーメントは静的な変位に関係することを理解する。

参考文献：

- ① Aki & Richards, Quantitative Seismology
- ② 松浦, 地球連続体力学（5章）, 岩波講座地球惑星科学

1.2 震源モデル

表現定理 (representation theorem)

目的1 観測された地震波形を表現するために、震源の効果と地下を波が伝播する効果に分けて考えたい。

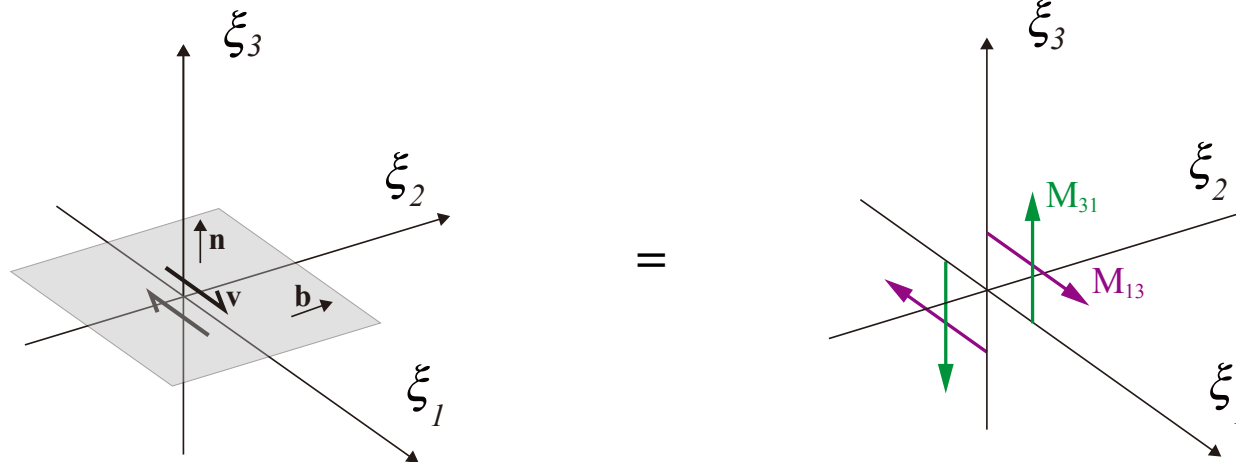
$$u_n(\mathbf{x}, t) = \int_{\Sigma} \left[C_{ijkl} \Delta u_i(\xi, t) n_j \right] * G_{nk,l}(\mathbf{x}, t; \xi, 0) dS$$

地震波形

震源の効果

伝播の影響

目的2 天下りの的に紹介された、モーメントテンソルと断層滑りの関係を理解したい。

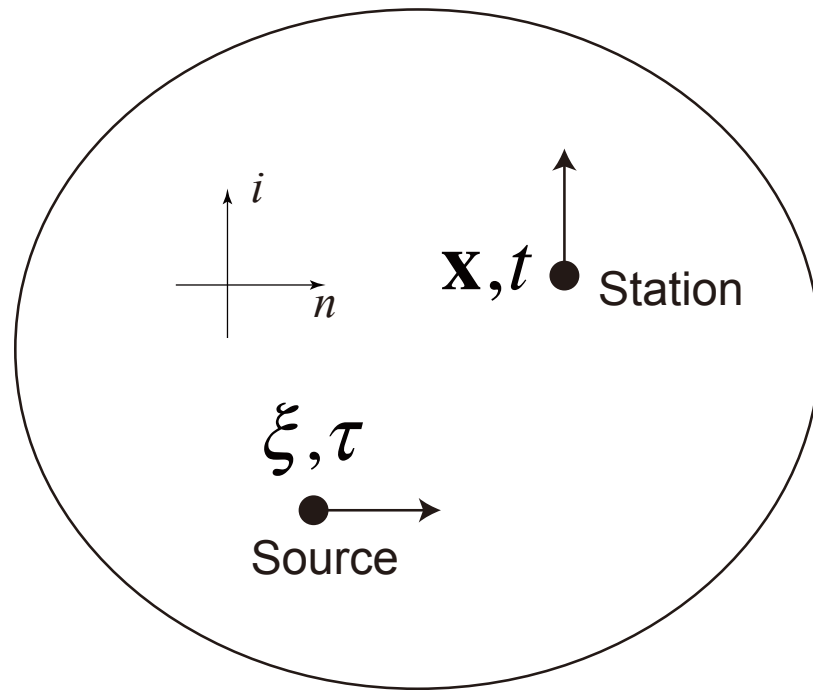


1.2 震源モデル

グリーン関数 $G_{in}(\mathbf{x}, t; \xi, \tau)$

弾性体のある点（震源 ξ ）に時刻 τ に働く n 成分方向の単位力（シングルフォース）によって生じる、観測点 \mathbf{x} 時刻 t での i 成分方向の変位：

$$G_{in}(\mathbf{x}, t; \xi, \tau)$$



1.2 震源モデル

グリーン関数の相反性

性質 1 時間相反性を持つ。

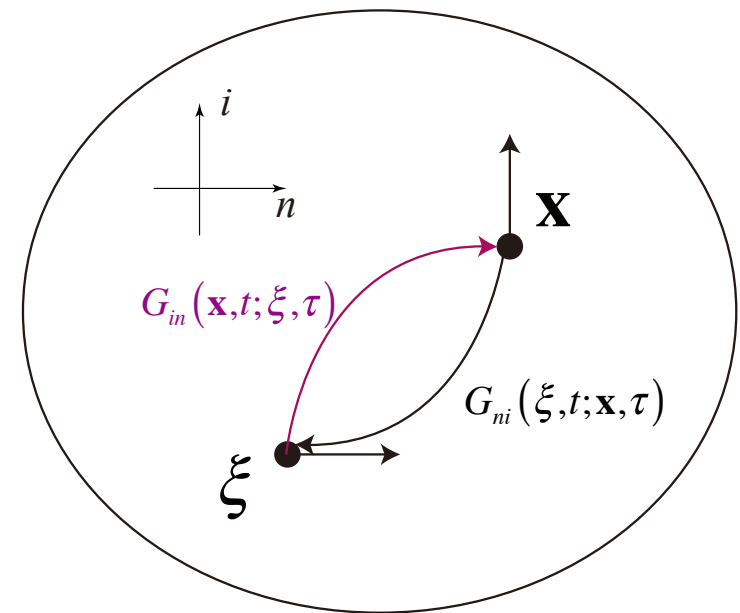
条件：境界条件不変かつ無限時間前に0

$$G_{in}(\mathbf{x}, t; \boldsymbol{\xi}, \tau) = G_{in}(\mathbf{x}, -t; \boldsymbol{\xi}, -\tau)$$

性質 2 空間相反性を持つ。

条件：ある時刻以前に、変位・速度が0 かつ全境界で変位またはトラクションが0

$$G_{in}(\mathbf{x}, t; \boldsymbol{\xi}, \tau) = G_{ni}(\boldsymbol{\xi}, t; \mathbf{x}, \tau)$$



1.2 震源モデル

表現定理

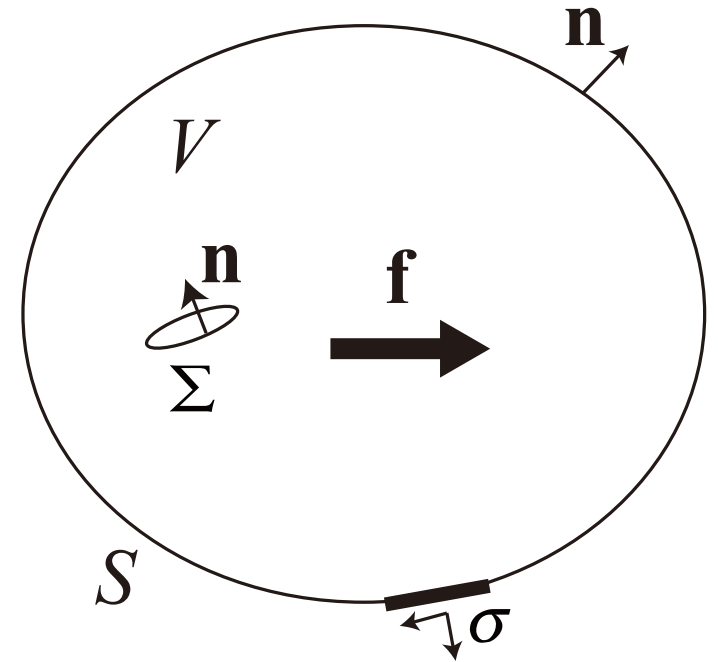
線形弾性体 体積 V , 表面 S を考える。

連続体の運動方程式は、

$$\rho \ddot{u}_i = \sigma_{ij,j} + f_i$$

表現定理より変位は、

$$\begin{aligned} u_n(\mathbf{x}, t) &= \int_V f_i(\xi, t) * G_{in}(\xi, t; \mathbf{x}, 0) dV(\xi) \\ &\quad + \int_{S+\Sigma} T_i(\xi, t) * G_{in}(\xi, t; \mathbf{x}, 0) dS(\xi) \\ &\quad - \int_{S+\Sigma} [C_{ijkl} u_i(\xi, t) n_j(\xi)] * G_{kn,l}(\xi, t; \mathbf{x}, 0) dS(\xi) \\ &= \int_V f_i(\xi, t) * G_{in}(\xi, t; \mathbf{x}, 0) dV(\xi) \\ &\quad + \int_{S+\Sigma} [\sigma_{ij}(\xi, t) n_j(\xi)] * G_{in}(\xi, t; \mathbf{x}, 0) dS(\xi) \\ &\quad - \int_{S+\Sigma} [C_{ijkl} u_i(\xi, t) n_j(\xi)] * G_{kn,l}(\xi, t; \mathbf{x}, 0) dS(\xi) \end{aligned}$$



1.2 震源モデル

コーシーの関係（復習）

応力ベクトル (T)

トラクションとも呼ばれ、ある微小面積に作用する単位面積あたりの力、応力との関係として、

$$T_i = \sigma_{ij} n_j$$

が成立。この式をコーシーの関係とよぶ。

2次元の場合だと簡単に導ける。

まずは x_1 軸方向の力の釣り合いから、

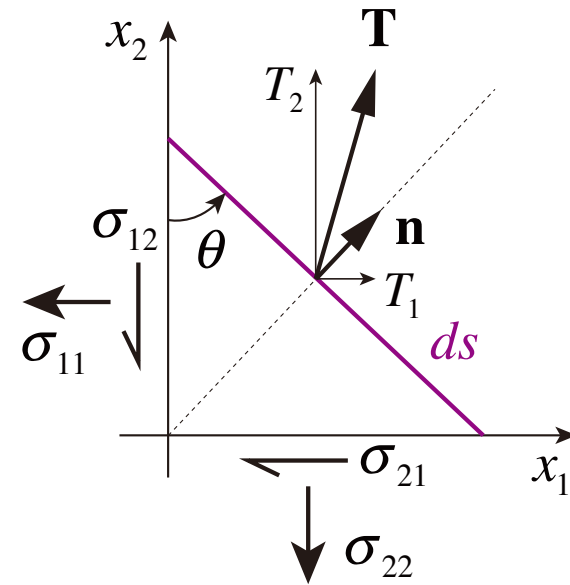
$$\begin{aligned} T_1 ds &= \sigma_{11} dx_2 + \sigma_{21} dx_1 \\ &= (\sigma_{11} n_1 + \sigma_{21} n_2) ds \end{aligned}$$

$$\therefore T_1 = \sigma_{11} n_1 + \sigma_{21} n_2$$

同様にして、

$$T_2 = \sigma_{12} n_1 + \sigma_{22} n_2$$

成立していることがわかる。



3次元問題でも面倒になるだけで、同じように下記の式が導ける（やってみよう）。

$$\begin{pmatrix} T_1 \\ T_2 \\ T_3 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \sigma_{11} & \sigma_{12} & \sigma_{13} \\ \sigma_{21} & \sigma_{22} & \sigma_{23} \\ \sigma_{31} & \sigma_{32} & \sigma_{33} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} n_1 \\ n_2 \\ n_3 \end{pmatrix}$$

1.2 震源モデル

表現定理（続き）

空間相反性を利用すれば

$$\begin{aligned} u_n(\mathbf{x}, t) = & \int_V f_i(\xi, t) * G_{ni}(\mathbf{x}, t; \xi, 0) dV(\xi) \\ & + \int_{S+\Sigma} [\sigma_{ij}(\xi, t) n_j(\xi)] * G_{ni}(\mathbf{x}, t; \xi, 0) dS(\xi) \\ & - \int_{S+\Sigma} [C_{ijkl} u_i(\xi, t) n_j(\xi)] * G_{nk, l}(\mathbf{x}, t; \xi, 0) dS(\xi) \end{aligned}$$

この式は、震源となるもの（体積力、面に働くトラクション、変位）から、任意の点の変位（変位場）を求める式となる。

1.2 震源モデル

表現定理 (続き)

シンプルに書くと

$$u_n = \int_V f_i * G_{ni} dV + \int_{S+\Sigma} \sigma_{ij} n_j * G_{ni} dS - \int_{S+\Sigma} C_{ijkl} u_i n_j * G_{nk,l} dS$$

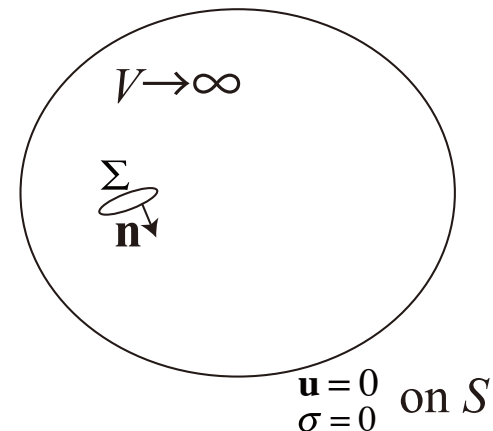
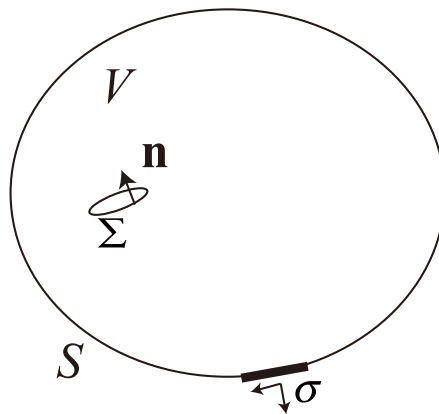
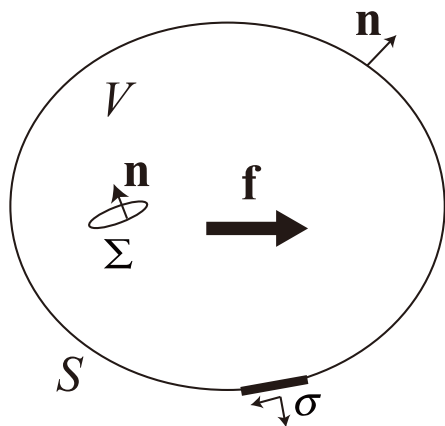
Body force

Surface traction

Surface displacement

まず、体積力を無視する。領域を十分に大きく取ると、表面 S での変位とトラクションは0となるはずである。便宜的に、法線ベクトルを Σ の内側にとると、上の式は、

$$u_n = \int_{\Sigma} \sigma_{ij} n_j * G_{ni} dS + \int_{\Sigma} C_{ijkl} u_i n_j * G_{nk,l} dS$$



1.2 震源モデル

表現定理（続き）

$$u_n = \int_{\Sigma} \sigma_{ij} n_j * G_{ni} dS + \int_{\Sigma} C_{ijkl} u_i n_j * G_{nk,l} dS$$

第一項はトラクションの連続性を考えると0となるので、

$$u_n = \int_{\Sigma} C_{ijkl} u_i n_j * G_{nk,l} dS$$

モーメントテンソルは、

$$M_{kl} = \int_{\Sigma} C_{ijkl} u_i n_j dS$$

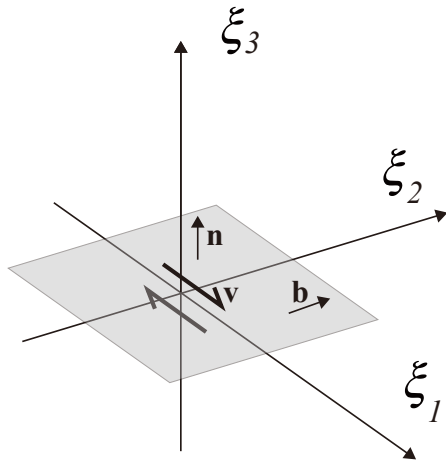
対応するグリーン関数は

$$G_{nk,l}$$

1.2 震源モデル

等価体積力

図のような断層面を考える。滑り分布が一定



$$\Delta \mathbf{u}(\boldsymbol{\xi}, t) = \begin{bmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \end{bmatrix} \Delta u(\boldsymbol{\xi}, t), \quad \mathbf{n} = \begin{bmatrix} 0 \\ 0 \\ 1 \end{bmatrix}$$

$$u_n(\mathbf{x}, t) = \int_{\Sigma} \left\{ C_{13kl} \Delta u(\boldsymbol{\xi}, t) * G_{nk,l} \right\} dS$$

断層面上では、せん断応力のみになるので弾性係数は、

$$C_{13kl} = \mu(\delta_{1k}\delta_{3l} + \delta_{3k}\delta_{1l})$$

のみの考えれば良い。総和規約を思い出し、表現定理で得られた式に代入すると、

$$u_n(\mathbf{x}, t) = \int_{\Sigma} \mu \Delta u(\boldsymbol{\xi}, t) * \left\{ \frac{\partial}{\partial \xi_3} G_{n1} + \frac{\partial}{\partial \xi_1} G_{n3} \right\} dS$$

1.2 震源モデル

等価体積力 (続き)

点震源を仮定、この仮定の本質は

- 1) 断層面上のグリーン関数を断層面上のある点で代表させる
 - 2) 震源時間関数を、時間のみの関数で表現できる
- よって、

$$u_n(\mathbf{x}, t) = \mu \int_{\Sigma} \Delta u(\xi, t) * \left\{ \frac{\partial}{\partial \xi_3} G_{n1} + \frac{\partial}{\partial \xi_1} G_{n3} \right\} dS$$

$$\begin{aligned} \text{点震源仮定} \rightarrow & \approx \mu \overline{\Delta u}(t) A * \int_{\Sigma} \delta(\xi_1) \delta(\xi_2) \left\{ \frac{\partial}{\partial \xi_3} G_{n1} + \frac{\partial}{\partial \xi_1} G_{n3} \right\} dS \\ & = \mu \overline{\Delta u}(t) A * \int_V \delta(\xi_1) \delta(\xi_2) \delta(\xi_3) \left\{ \frac{\partial}{\partial \xi_3} G_{n1} + \frac{\partial}{\partial \xi_1} G_{n3} \right\} dV(\xi) \end{aligned}$$

ここで A は断層面積。結局

$$u_n(\mathbf{x}, t) = \mu \overline{\Delta u}(t) A * \int_V \left\{ \delta(\xi_1) \delta(\xi_2) \left[-\frac{\partial \delta(\xi_3)}{\partial \xi_3} \right] G_{n1} + \left[-\frac{\partial \delta(\xi_1)}{\partial \xi_1} \right] \delta(\xi_2) \delta(\xi_3) G_{n3} \right\} dV(\xi)$$

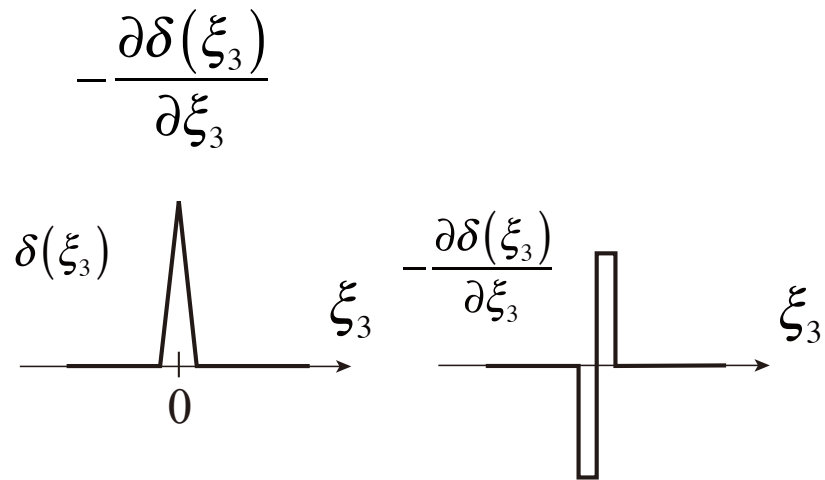
式で表現すると

$$\begin{aligned} G_{ni}(\mathbf{x}, t; \xi, \tau) & \approx G_{ni}(\mathbf{x}, t; \xi_c, \tau) \\ S_c(t, \gamma) & = \int \mu \Delta u \left(\xi, t - \frac{\xi \cdot \gamma}{c} \right) dS \\ & \approx \int \mu \Delta u(\xi, t) dS = \mu \overline{\Delta u}(t) A \end{aligned}$$

1.2 震源モデル

等価体積力 その3

デルタ関数の空間微分の意味を考える



従って、

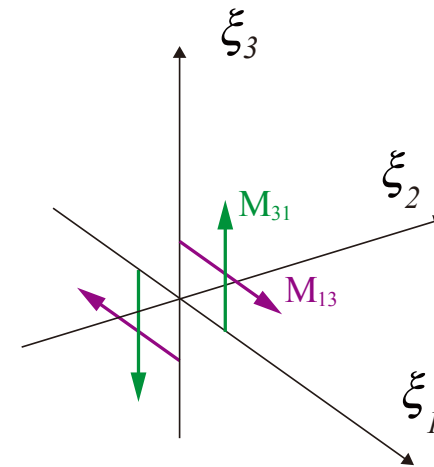
$$\int_V \delta(\xi_1) \delta(\xi_2) \left[-\frac{\partial \delta(\xi_3)}{\partial \xi_3} \right] G_{n1} dV(\xi)$$

は ξ_3 軸上に始点がある ξ_1 軸方向に作用する偶力によって生じる変位に他ならない。

つまりに M_{13} 相当によって生じる変位同様に、

$$\int_V \delta(\xi_1) \delta(\xi_2) \left[-\frac{\partial \delta(\xi_3)}{\partial \xi_3} \right] G_{n1} dV(\xi)$$

これは M_{31} 相当によって生じる変位



1.2 震源モデル

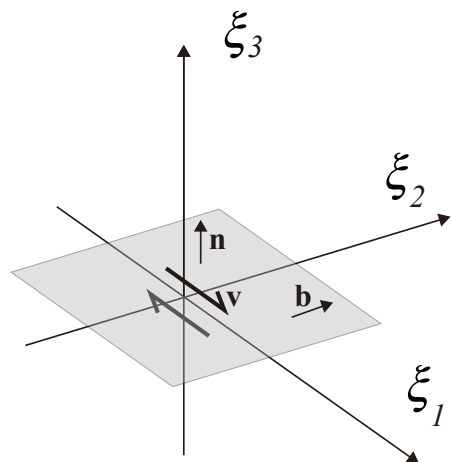
等価体積力 その4

まとめると、断層運動の等価体積力は**ダブルカップル**、つまり**モーメントテンソル**で表現できる。

断層運動

$$\Delta \mathbf{u}(\boldsymbol{\xi}, t) = \begin{bmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \end{bmatrix} \Delta u(\boldsymbol{\xi}, t), \quad \mathbf{n} = \begin{bmatrix} 0 \\ 0 \\ 1 \end{bmatrix}$$

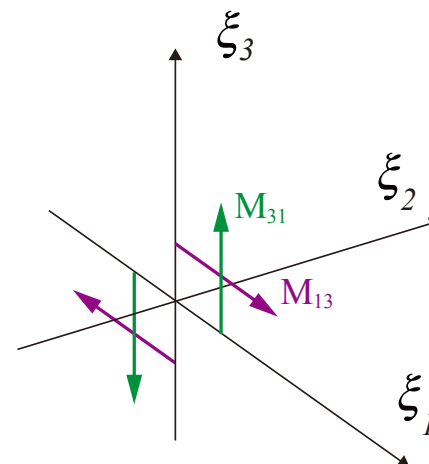
断層面積 A + 点震源仮定



=

モーメントテンソル

$$\begin{bmatrix} 0 & 0 & \mu \overline{\Delta u}(t) A \\ 0 & 0 & 0 \\ \mu \overline{\Delta u}(t) A & 0 & 0 \end{bmatrix}$$



1.2 震源モデル

地震モーメント

式を書き直すと

$$u_n(\mathbf{x}, t) = \mu \overline{\Delta u}(t) A^* \int_{\Sigma} \delta(\xi_1) \delta(\xi_2) \left\{ \frac{\partial}{\partial \xi_3} G_{n1} + \frac{\partial}{\partial \xi_1} G_{n3} \right\} dS(\xi)$$

時間を ∞ に持って行くと、

$$u_n(\mathbf{x}, \infty) = \mu \overline{\Delta u}(\infty) A \times \left\{ \frac{\partial}{\partial \xi_3} G_{n1}(\mathbf{x}, \infty; \xi, 0) + \frac{\partial}{\partial \xi_1} G_{n3}(\mathbf{x}, \infty; \xi, 0) \right\}$$

つまり、最終的な地殻変動は、地震モーメント $M_0 = \mu \overline{\Delta u}(\infty) A$ に比例することとなる。

地震モーメントは、**静的な変位置量**で定義されていることが分かる。つまり、地面が揺れなくても求めることができる。

地震モーメントは地震学の基礎になっているが、本当に地震モーメントという値はそんなに素晴らしいものなのだろうか？ 地震動と地震モーメントの関係という視点で、問題点について考えてみよう。